

# 国語

解答注意

問題は全部で三十四問あります。

解答シートへの記入例

①の答えが2のときには

① ↓

と記入します。

数字の記入例

○印の部分に注意してください。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔 中学三年生の洋は、自転車に夢中になっていて、自転車の大会に出場することを、祖父さんから許可してもらおうとしている。 〕

物心ついた時から自転車が好きだった。かすかに記憶がある。\*母親と暮らしていた幼児の頃、玩具のような補助輪つきの自転車に乗って遊んでいた。どの玩具より、どの遊びより補助輪つきの自転車に乗るのが好きだった。母親の笑顔がほんやりと思ひ浮かぶ。上手ね、洋ちゃんはすぐにパパみたいに自転車で走るようになるのね。母親の嬉しそうな声が耳に蘇る。そうだ。自転車の記憶は母親と父親とに結びついている。父親は自転車乗りだった。だから、自分は自転車が好きなのだ。細ボウのひとつひとつにその思いが刷り込まれているのだ。だけど、いや、だからこそ祖父さんは自転車が嫌いなのだ。自転車が息子を奪ったと思っているのだ。孫まで奪い取られたくない。そう強く思っているに違いない。

洋は覚悟を決めた。祖父さんには隠し事をしない。① すべてを打ち明けて、許してもらおう。

「祖父さんには謝らなければならないことがある」

祖父さんの目が鈍く光ったようだった。

「ごめん、と洋は頭を下げた。」

「今年の春、祖父さんには内緒で自転車大会に出た」

「春？ 夏休み前じゃないか？ お前が自転車を持って帰ったのは」

「本当は春なんだ」洋は言った。「あの時はごまかしたけれど、\*ロードバイクは大会で貰ったものじゃない。チーム練習に参加して貰ったんだ」

祖父さんは Ⅱ 。事情を把握できないようだ。最初から説明することにした。

「春休みに田波の『ニュータウン南雲』で自転車の大会があったんだ。優勝賞品は競技用自転車。賞品目当てで祖父さんには内緒で出場した。優勝はできなかったけれど、南雲デンキのジュニアクラブに練習参加しないかと誘われた。それで、通うことにした。自分より速い奴がたくさんいるなんて悔しいし……本物のロードバイクに乗って本格的に走ってみたかったし」

祖父さんはゆっくりとうなずいた。事情が呑み込めてきたようだ。練習に通っていたことは薄々気づいていたのだろう。毎週末、出かけることは、それまでなかった。気づかない方が不自然だ。

「南雲デンキ自転車部にはジュニアクラブがあって、そこは練習生から選手を選んだ」

選考方法や練習の内容も簡単に説明した。チームのコーチやメカニック、メンバーの話もした。祖父さんは黙って聞いていた。時々、焼酎の麦茶割りをすすする。麦茶を注ぎ足すだけで焼酎を補給しないから、中身はほぼ麦茶だ。

「夏休み前に練習参加はやめた。それから田波にはいつていない」

「なぜ、やめた？」

「祖父さんに隠れてこそこそするのが嫌になったから。それに、正式な選手になれば、毎日のように『ニュータウン南雲』に通わなければならないし……」

洋は口を閉じて、奥歯を噛み締めた。練習生を競わせるやり方も気に入らなかった。声には出さずに続けた。

「一度は諦めようとした」深呼吸してから言った。「でも、諦めきれなかった」

②腕組みをしたまま、祖父さんは天井を見上げた。

のど仏がくつきりと形を現している。肌はいつも日焼けして褐色だ。

「自転車が本当に必要だとわかったんだ。自転車に乗らないと、生きている感じがしない。祖父さんは思い込みだと言うけれど、ぼくには実感なんだ。生きているのに生きている気がしないのは辛いよ」

うんざりだ。生きながら墓地に埋められたようなものだ。

「祖父さん」洋は座布団からおりて、畳に両手をつき、頭を下げた。「嘘をついたり隠し事をしたりして、ごめんなさい。もう二度としませんから、許してください。それから、今度の大会に出る許可をください」

いきなり襟首をつかまれて、引き起こされた。ものすごい力だった。

「みつともない真似をするな」

力任せに畳に投げつけられた。反転して、洋は顔を上げた。祖父さんの顔は真っ赤だ。こめかみに血管が浮いている。今にも切れそうだ。

「頼みます」

両手をついて深く頭を下げた。鼻先が畳に触れそうになる。祖父さんの返事があるまで顔を上げないつもりだった。祖父さんはなにも言わない。また引き起こされ、畳に転がされた。③それを何度か繰り返した。祖父さんの息遣いが荒くなり、やがて引き起こす力が弱くなった。洋は両手をつき、頭を下げた。冷蔵庫がうる音音が聞こえてくる。洋はゆっくりと息をした。畳の香りが鼻に流れ込んできた。日焼けしてスリ切れそうな畳でも香りがあるのか、と場違いに思った。

「自転車がそんなに好きか」

頭上から祖父さんの声が聞こえた。

「好きです」

顔を上げた。

祖父さんはあぐらをかき、腕組みをして目を閉じている。<sup>④</sup>閉眼の<sup>※</sup>不動明王像があるなら、こんな感じだろう。祖父さんの背中のあたりにめらめらと燃え上がる炎が見えるようだ。

「わしは反対だ」

祖父さんは怒鳴った。

窓ガラスが震えるほどの大声だった。

洋は正座の姿勢のまま、三十センチほどしろに飛びのいた。

不動明王が開眼し、剣を振り回して荒れ狂うのではないかと思った。

「自転車がどんなにいいものか、わしは知らん。知りたくもない。そんなものに熱中する馬鹿の気持ちもわからん。洋、お前が大馬鹿者でないなら、考え直せ。まっとうな道を歩め。自転車乗りになるうなどと思うな。それがわしの願いだ」

祖父さんは真つ赤な目で洋をにらみつけた。こめかみに血管が浮き、額が汗と脂でてかてかと光っている。これ以上、興奮させてはいけない。

祖父さんは普段でも血圧が高い。

⑤「祖父さん、落ち着いて」

「黙れ」<sup>①</sup>カツした。「最後までわしの言うことを聞け」

祖父さんはコップに残っていた麦茶を飲み干し、ポットから注ぎ足して、もう一杯飲んだ。右腕で口のまわりを拭い、洋を見据えた。

「わしは反対だ」

それはもう聞いた。祖父さんは反対だ。昔から自転車を嫌っている。今になって変わるとは洋も期待していない。祖父さんは頑固だ。

「反対だが、お前がどうしても言うのなら、仕方がない。必要なことはしてやる。だが、協力はしない。応援もしない。全部、お前がお前の責任でやれ。そして、決して弱音を吐くな。弱音を吐くくらいなら、今ここでやめてしまえ」

ばん、と右手を卓袱台<sup>ちやくぶくだい</sup>にたたきつけ、祖父さんは勢いをつけて立ち上がった。整理棚の引き出しを開け、中をひっかき回すと、ペンと印鑑を持って戻ってきた。

申込書<sup>もうしなづ</sup>を開き、内容を確かめようともせず、保護者の欄に自分の名前を書き入れ、渾身<sup>こんしん</sup>の力を込めて印鑑を押した。

「これでいいか？」

「ありがとう、祖父さん」

⑥「引<sup>ひ</sup>手<sup>て</sup>繰<sup>く</sup>る<sup>く</sup>ようにして申込書を取った。<sup>※</sup>金釘流<sup>かなくぎりゅう</sup>の力強い文字で署名されている。岩肌<sup>いわだ</sup>を鑿<sup>のみ</sup>で削り取ったような文字だ。祖父さんらしい署名とくつきりとした印影を見てもまだ洋は半信半疑だった。

(川西蘭『セカンドウィンドー』より)

※母親 洋の母親は事情があつてヨーロッパで暮らしている。

※ロードバイク 舗装された道路を高速で走行するための自転車で、自転車のレースに用いられることが多い。

※不動明王 仏教の守護神で、怒った表情をしている。

※金釘流 じょうずではない文字をあざけつた言い方。

問一 傍線部①から④のカタカナの部分に当てはまる漢字を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

①	抱	2	縫	3	砲	4	胞	5	包	(解答は①の欄)
②	悟	2	吾	3	互	4	御	5	誤	(解答は②の欄)
③	冊	2	擦	3	察	4	刷	5	撮	(解答は③の欄)
④	葛	2	掲	3	渴	4	喝	5	滑	(解答は④の欄)

問二 傍線部I「い」の動詞の活用の種類として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 五段活用      2 上一段活用      3 下一段活用      4 サ行変格活用      5 カ行変格活用

(解答は⑤の欄)

問三 傍線部①「すべて」を打ち明けて、許してもらおう」とありますが、洋はどんなことを言おうと思ったのですか。その説明として適当なものを、

次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑥の欄)

- 1 春休みの自転車の大会に祖父さんに内緒で出場し、優勝できなかったが、南雲デンキのジュニアクラブの練習に誘われて参加しているうちに方針に違和感を感じ、夏休み前に練習参加はやめたが、今度の自転車の大会への出場を許可してほしいということ。
- 2 春休みの自転車の大会に祖父さんに内緒で出場したことが心に引っかかっている、南雲デンキのジュニアクラブの練習も気分が盛り上がり、参加をやめたが、祖父さんに隠し事はしないので、今度の自転車の大会への出場を許可してほしいということ。
- 3 春休みの自転車の大会には自信がなくて祖父さんには内緒で出場し満足できる成績ではなかったが、その後南雲デンキのジュニアクラブの練習に参加して自信をつけたので、優勝が目標である今度の自転車の大会への出場を許可してほしいということ。
- 4 春休みの自転車の大会には南雲デンキのジュニアクラブの代表として出場したが、優勝できなかったのは祖父さんに内緒で出場したことが心のすみにあつたからだと思つた、今度の自転車の大会では必ず優勝するので、参加を許可してほしいということ。
- 5 祖父さんに内緒で出場した春休みの自転車の大会では満足できる成績ではなかったが、南雲デンキのジュニアクラブに参加して練習を積んでいるので、今度の自転車の大会への参加を許可してもらい、今の自分の実力を試したいということ。

問四

II

に当てはまる適当な言葉を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 手のひらを返した
- 2 頭角をあらわした
- 3 かぶとを脱いだ
- 4 首をひねった
- 5 木で鼻をくくった

(解答は⑦の欄)

問五

傍線部②「腕組みをしたまま、祖父さんは天井を見上げた」とありますが、このときの祖父さんの気持ちとして適当なものを、次の中から

一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑧の欄)

- 1 自転車に打ち込む洋の熱意を感じて、自転車に熱中していた自分の過去を懐かしく思い出している。
- 2 自転車を嫌い続けてきたが、自転車には意外な魅力があるのかもしれないと考え直し始めている。
- 3 自転車を嫌う気持ちに変化はないが、自転車に打ち込む洋の気持ちも理解しようとし始めている。
- 4 自転車に魅力があることは認めるが、洋にはやはり自転車ではない別の道を歩んでほしいと願っている。
- 5 洋が本当に必要なものを見つけたことを喜んでいて、その喜びを洋に気づかれまいとしている。

問六

傍線部③「それを何度か繰り返し返した」とありますが、ここから読み取れる様子として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑨の欄)

- 1 自転車大会に出場することを、祖父さんにどうしても許可してもらいたいという洋の熱意がゆるがない様子。
- 2 自転車大会に出場したいという洋の気持ちの本物がどうかを、祖父さんが冷静に確かめようとしている様子。
- 3 自転車に関連のあるいろいろなことについてこれまで洋が内緒にしていたことを、祖父さんが立腹している様子。
- 4 この場面では、自分が腹を立てているふりをしたほうが洋のためになると、祖父さんが冷静に判断している様子。
- 5 最近の洋の態度を不満に感じていた祖父さんの気持ち、洋とのやり取りに爆発して収まらなくなっている様子。

問七 傍線部④「閉眼の不動明王像があるなら、こんな感じだろう。祖父さんの背中あたりにめらめらと燃え上がる炎が見えるようだ」とありますが、洋が感じている祖父さんの様子として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。(解答は⑩の欄)

- 1 洋に対する祖父さんの怒りが、時間と共にようやく収まってきている。
- 2 洋に対する祖父さんの怒りが、祖父さんの体内にめらめらとうごめいている。
- 3 洋に対して手荒なことをしたという反省が、祖父さんの心にきざしている。
- 4 洋に対する祖父さんの本当の怒りが、これから爆発しようとしている。
- 5 洋に忠告しても聞く耳を持つはずがないと、祖父さんがあきらめている。

問八 傍線部⑤「祖父さん、落ち着いて」とありますが、この部分を朗読するとしたらどのように読むとよいですか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。(解答は⑪の欄)

- 1 洋が祖父さんの体調を気づかって、これ以上興奮させまいとする配慮がわかるように、諭すような口調で読む。
- 2 洋が祖父さんの体調の急激な変化に気づきあわてていることがわかるように、切迫した感じの口調で読む。
- 3 洋が興奮している祖父さんをおとなげないと感じていることが伝わるように、子どもを諭すような口調で読む。
- 4 洋が祖父さんの予想外の怒りに接しておびえていることが伝わるように、必死にお願いするような口調で読む。
- 5 洋が祖父さんとの口論に負けまいとしていることが伝わるように、息せき切った感じの力強い口調で読む。

問九 傍線部⑥「引っ手繰るようにして申込書を取った」とありますが、洋がこのように行動した理由として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。(解答は⑫の欄)

- 1 自転車の大会への出場に迷いが生じたので、申込書に祖父さんが印鑑を押すのを少し待ってもいいと思ったから。
- 2 申込書に祖父さんが本心に反して印鑑を押してくれたと感じたので、祖父さんにこれ以上迷惑をかけたくないと思ったから。
- 3 申込書に祖父さんが印鑑を押してくれたことは予想外でうれしかったが、署名が金釘流の文字ではないかと心配になったから。
- 4 申込書に祖父さんが印鑑を押してくれるのを諦めかけていたので、印鑑が押された申込書を早く自分のものにしたかったから。
- 5 祖父さんが申込書の内容を確かめずに印鑑を押して署名をしたので、正しく書かれているかどうか不安になったから。

問十 本文の表現の特徴として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑬の欄)

- 1 体言止めを多用した文体が、洋と祖父さんの勢いのある言動を的確に表して文章に小気味よいリズム感を与えている。
- 2 洋と祖父さんの息づまるやりとりを、洋と祖父さんの様子を丁寧に描写することで臨場感豊かに描いている。
- 3 祖父さんの健康状態を心配しているので、本心を打ち明けられない洋の苦しさを洋の心理に焦点をあてて描いている。
- 4 仲たがいでいた洋と祖父さんが互いに歩み寄っていく様子を、場面の情景の変化に重ね合わせて描いている。
- 5 成長した洋が自分の道を歩み始めたことへの祖父さんの複雑な思いを、回想場面を効果的に織り込んで描いている。



二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

すべての生き物は息を吸ったり吐いたりしています。

普通に生きていると、呼吸はあまりにも当たり前な、自然なからだの作用です。息の仕方を誰かに教えてもらったり、伝えたりということは、普段は全く考えられないことでしょう。

しかし、実は「息」というのは一つの身体文化なのです。私たち日本人は、呼吸というものに、<sup>I</sup> 関して、はっきりとした運用スタイル、<sup>②</sup> 固有の文化を持っています。

今、それは急速に失われつつあります。今ここで見直しておかなくては、かつての優れた日本人の呼吸の仕方はもう完全に廃れてしまう。

戦後日本は、こと身体文化に関して、<sup>③</sup> 当たり前のことを当たり前だからという理由で、きちんと育んできませんでした。そのツケは、今至るところで<sup>※</sup>顕在化しつつあります。そんな観点から考えていきたいと思えます。

よく学力問題とセットになって、「現代人は知力が劣ってきている」と言われますが、必ずしもそうではないでしょう。現代社会は処理しなければならぬ情報量が多くなる。複数のことを同時に判断して次々と処理していく「マルチタスクな能力」ということで言えば、昔の日本人より格段に優れた才を有しています。それは子どもにしてもそうです。

しかし、昔に比べてはつきり劣っていると断言できるもの、それは呼吸と連動する身体文化です。

私はこれまで身体論に関する著書の中で、「<sup>腰</sup>腰肚文化」という表現を多く用いてきました。

腰と肚の構えがしつかりすることで、肉体に力強さが漲り、<sup>なま</sup>落ち着いてどっしりとした動きができる。これは一つの身体的「<sup>わざ</sup>技」であり、反復練習によって身につけられるものです。

この腰や肚の据わった状態というのは、腹で深い息をすることによって可能になります。「腰肚文化」を支えていたのは、紛れもなく呼吸力なのです。

呼吸とは、どんな小さな生き物であろうと、生きとし生けるものすべてが行うものです。

しかし、一般に私たちが「息」と言う時、それは人間が行うものを意味します。単純に呼吸そのものを指すこともありますが、むしろ、<sup>④</sup> 息の仕方でその人が分かる、といった心理的な意味合いを多く含みます。

例えば、息がハアハアしている人を見て、「この人は焦っている」とか、「心理的に追い込まれている」と判断する。息を読んで、その人の心理的状况をとらえているわけです。ここに「息」の特徴があります。

Ⅱ、心理、心の在り方、精神の在り方と息はセットだと、暗黙のうちに感じとっている。

これをもっと体系的に——人間の心の在り方と、その呼吸の仕方との関係を考えたのがヨガです。日本の身体文化というのは大きな流れで見ると、やはりヨガ、インドの精神身体文化が中国を通じて流れてきた、そうした流れを源流としています。その呼吸観は、<sup>④</sup> 連メンたる何千年という悠久

の流れの中で培われてきたものです。

腰が身体的なものであるのに対し、息は、その身体と精神を結びつけるものです。息は、からだと心をつなぐ「道」です。

《腰肚文化》の衰退と共に、それを支えた《息の文化》もまた忘<sup>①</sup>キヤクされつつあります。千数百年にわたってずっと受け継がれてきた流れが、わずかに戦後五十年でパタリと途切れてしまった。このことが、昨今、社会のさまざまな面において悪影<sup>②</sup>キヨウを及ぼしています。

かつて、日本人は強い呼吸力を持っていました。大人も子どもも、武士も職人も、生活の中で、息が《技》や《芸》になっていた。日本はさまざまな《息の文化》を持つ国だったので。かつて当たり前にできていたのは、呼吸というものが生活スタイルにあまりにも密着したものだだったからです。

現代日本人の呼吸力が恐ろしいほどの勢いで衰退しているのは確かなことです。社会に呼吸力を育む土壌がなくなった今、あらためて「息」について、きちんと見つめ直してみたいと思います。

では、「息は一つの文化である」とはどういうことなのでしょう。分かりやすい例として、坐り方について見てみましょう。

正坐——両膝を折りたたみ、踵を尻につけるこの坐り方は、人間が自然にできる姿勢ではありません。非自然な姿勢です。

Ⅲ できるのであって、欧米人は非

常に苦手です。

日本人であつても正坐を教えられてこなかった人にとっては、単に苦痛な坐り方ではしかない。

今、日本人は一般的にどのくらいの時間、正坐をしていられるのでしょうか。十代、二十代では数分と耐えられず、すぐに「足が痛い」「しびれた」と音を上げます。若い世代に限らず、もはや大多数の日本人にとって<sup>③</sup>正坐は苦しい坐り方になりました。

ところが、正坐が苦にならない人たち、それは今の七十代以上の世代です。膝が悪い人は別にして、「正坐のほうが楽だ」と言う人も多い。だから、疲れて一休みする時にも正坐する。椅子に坐つても、ちよこんと椅子の上で正坐していたりする。正坐をすることでからだも心も休まる。これは、

一つ身体運用の「型」が、からだに染みついていくということです。

型というのは最初は不自由なものです。慣れてしまうと水が通る道みたいにエネルギーが即座に通ります。一度からだに染み込むと、それが「自然」になる。

正坐という坐り方の「型」が、からだを休めるとき《技》になっているわけです。

同様に、<sup>④</sup>胡坐を組むことも一つの「型」であり、「技」として用いられていました。

ある集団に属する人間が、獲得した知恵や手法を伝承していくこと、これは紛れもなく文化です。ですから、正坐や胡坐というのは坐り方の文化化です。

一度「型」を習得すると、からだは疲れにくく、長時間でも苦にならずに一定の姿勢を維持することができますし、高い集中力を持続できます。日本には、ある身体的手法や身体運用を、からだに「型」として定着させる文化があつたのです。

(齋藤孝「呼吸入門」より)

※顕在化 はつきりと分かる形に現れていること。

問一 傍線部①から④のカタカナの部分に当てはまる漢字を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

①	↓	1	幅	2	縮	3	免	4	面	5	綿
②	↓	1	却	2	客	3	脚	4	去	5	叩
③	↓	1	競	2	叫	3	興	4	郷	5	響
④	↓	1	還	2	環	3	勤	4	巻	5	貫

(解答は⑭の欄)  
(解答は⑮の欄)  
(解答は⑯の欄)  
(解答は⑰の欄)

問二 傍線部Ⅰ「関」の部首と組み合わせると一つの漢字になる語を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1	日	2	主	3	上	4	糸	5	欠
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

(解答は⑱の欄)

問三 傍線部①「息」というのは一つの身体文化なのです」とありますが、どういうことですか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑲の欄)

- 1 戦前の日本では息の文化を教える場所がたくさん存在したので、誰でも息の文化に触れる機会があったということ。
- 2 戦前の日本では処理しなければならぬ情報量が少なかったため、今よりも身体文化に注目する余裕があったということ。
- 3 かつての日本人は身体文化をきちんと育まなくても、日常生活の中で自然に息の仕方が身についたということ。
- 4 かつての日本人は人間の心の在り方と、呼吸の仕方との関係を考えて、大きな流れの身体文化を考案したということ。
- 5 かつての日本人は、生活の中で息が〈芸〉や〈技〉になっていて、さまざま〈息の文化〉を持っていたということ。

問四 傍線部②「固有の文化」とありますが、筆者にとっての「文化」の定義として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑳の欄)

- 1 正坐や胡坐のように、ある集団に属する人間が、獲得した知恵や手法を伝授していくもの。
- 2 当たり前のことなので、きちんと育まなくても人々の間にいつの間にか継続して伝わっていくもの。
- 3 人間が行うものであり、心の在り方や精神の在り方をよりよいものに改善していくこととするもの。
- 4 インドに発生し中国を通じて日本に流れてきたものであり、流れの終着点の日本で花開いたもの。
- 5 生活スタイルに深く密着していて、それがないと日常生活に何らかの支障が生じてしまうもの。

問五 傍線部③「当たり前前のことを当たり前前だからという理由で、きちんと育んできませんでした」とありますが、筆者はそのことによってどうなったと考えていますか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。(解答は②の欄)

- 1 現代人が、複数のことを同時に判断して次々に処理していく「マルチタスクな能力」を身につけることができるようになった。
- 2 〈腰肚文化〉が人々に浸透し、人々の肉体に力強さが漲ったために、落ち着いてどっしりとした動きができるようになった。
- 3 「息」という一つの身体文化が急速に失われてしまい、かつての日本人の誰もができた呼吸の仕方が完全に廃れてしまった。
- 4 現代人は昔に比べて呼吸と連動する身体文化に関連のある知力が劣ってきているので、情報の処理がうまくできなくなった。
- 5 昔は生活スタイルに呼吸が密着していたが、今は社会に呼吸力を育む土壌がないので、さまざまな弊害が現れている。

問六 傍線部④「息の仕方でその人が分かる」とありますが、どういうことですか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。(解答は②の欄)

- 1 息をするときの、その人の様子から、その人の呼吸の熟練の程度がわかるということ。
- 2 息をするときの呼吸の音の響きから、その人の体の調子がある程度わかるということ。
- 3 その人の呼吸の様子から、その人が任されている仕事の大変さがわかるということ。
- 4 その人の息の仕方、その人の人生への積極性がある程度判断できるということ。
- 5 その人の息の仕方、その人の心理的状况を察知することができるということ。

問七 

II	III
----	-----

 に当てはまる言葉の組み合わせとして適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。(解答は③の欄)

- |           |         |           |          |           |           |
|-----------|---------|-----------|----------|-----------|-----------|
| 1 II つまり  | III だから | 2 II すなわち | III ところが | 3 II たとえば | III したがって |
| 4 II ところで | III ただし | 5 II ところが | III あるいは |           |           |

問八 傍線部⑤「正坐は苦しい坐り方になりました」とありますが、正坐が苦しい坐り方ではない世代の説明として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。(解答は④の欄)

- 1 十代、二十代の世代では、部活動などで正坐を教え込まれたことが多く、坐り方の一つとして正坐にふだんから親しんでいるので、正坐の「型」が苦しいものではないのだ。
- 2 七十代以上の世代は子どもの頃から居ずまいを正す時の姿勢として正坐を教え込まれていて、正坐がからだの「型」として身につけているので、正坐が苦しくないのである。

- 3 七十代以上の世代は、身体運用の「型」として正坐に価値を置いているので、疲れて休むときにも正坐をする場合が多く、いつの間にか正坐が苦しい坐り方ではなくなったのである。
- 4 七十代以上の世代は、十代、二十代の世代が正坐をしてすぐ音を上げるのを見てだらしなさと感じ、鍛錬として正坐を継続しているうちに、正坐を苦しいものとは感じなくなったのだ。
- 5 七十代以上の世代は、膝の具合が悪くてもそれをあまり感じない正坐の「型」が身についているので、正坐を苦しい坐り方とは感じないのである。

問九 傍線部⑥「胡坐を組むことも一つの『型』であり、『技』として用いられていました」とありますが、そのことからどんなことがわかりますか。

その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑮の欄)

- 1 胡坐を組む姿勢は習わなくてもできる自然な姿勢であり、長い間、多くの日本人に親しまれてきたということ。
- 2 胡坐を組む姿勢は日本だけで発達したものであり、その姿勢には日本人の精神性が現れているということ。
- 3 胡坐を組むのは習わなければできないものではなく、教える人が減ってしまったということ。
- 4 胡坐を組むほうが正座をするよりも楽に感じる人がいて、そういう人にはきわめて楽な姿勢だったということ。
- 5 胡坐を組むという坐り方に慣れていくうちに一つの型になり、からだを休めるときの技になっていたということ。

問十 この文章の内容と合っているものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑳の欄)

- 1 呼吸は生活に密着しているために大切さには気づきにくいですが、心の在り方よりも、まず、息の仕方を学習するほうが大切だ。
- 2 今の日本でヨガがブームになっているのは、日本で呼吸と連動する身体文化の衰退に危機感を抱いている人が多いからだ。
- 3 今の時点で、息が日本固有の文化であることを見直さないと、優れた日本人の呼吸の仕方は完全に忘れられてしまう。
- 4 身体文化を土台にして日本の文化は成り立ってきたので、情報量が多い現代社会でも日本の文化の土台がゆるぐことはない。
- 5 戦後の日本では、身体文化がある程度完成の段階に到達したので、身体文化を教育する必要は取り立てて生じていない。

三 次の古文とその現代語訳を読んで、後の問いに答えなさい。

かくのみ思ひくじたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、母、物語など求めて見せたまふに、げにおのづから慰みゆく。紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおほゆれど、人語らひなどもえせず。誰もいまだ都なれぬほどにて、(ア) え見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおほゆるまに、この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへと、心のうちに祈る。親の太秦に籠りたまへるにも、異事なく、このことを申して、出でむまにこの物語見果てむと思へど、見得ず。

② いと口惜しく思ひ嘆かるるに、をばなる人のあなかりより、のぼりたる所にわたいたれば、「いとうつくしう、生ひなりにけり。」など、あはれがり、めづらしがりて、帰るに、「何をか奉らむ。まめまめしきものは、(イ) まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなるものを奉らむ。」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将・とほぎみ・せり河・しらら・あさうづなどいふ物語ども、一袋とり入れて、得て帰るここのちの、うれしさぞいみじきや。

(『更級日記』より)

〔現代語訳〕 このようにふさぎこんではかりるので、心を慰めようと、心配して、母が、物語などを求めて見せてくださるので、本当に自然に心がしずまってゆく。(源氏物語の) 若紫の巻を見て、その続きを読みたいと思つたが、人に相談することもできない。(家の) 誰もまだ都に住みなれないころなので、え見つけず。たいそうじれたく、読みたくてたまらないので、この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と心の中で祈る。親が太秦へ参詣なさったときにも(一緒に行って)、ほかのことは念頭になく、このことを申して、出でむまにこの物語見果てむと思へど、見得ず。

いと口惜しく思ひ嘆かるるに、叔母にあたる人が地方から上京して来ていて、(ある日私が) その人の所に行くと、「たいそうかわいらしく成長しましたねえ。」などと、あはれがり、めづらしがりて、帰る時に、「何をさし上げましょうか。実用的なものは、まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなるものを奉らむ。」と言つて、源氏物語の五十余巻を、櫃に入つたまま、(そのほかに)「在中将」「とほぎみ」「せり河」「しらら」「あさうづ」などといういろいろな物語を、一つの袋に入れて(くださった。それらの物語を) もらつて帰る気持ちのうれしさぞいみじきや。

※太秦 ここでは、京都にあつたお寺を指す。

※櫃 ふたのついた大型の箱。

※在中将 ここでは「伊勢物語」を指すと思われる。

問一 傍線部(ア)・(イ)の文中での意味として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(ア) え見つけず

1 ついに見つけることができた

2 見つけたいとは思わない

3 見つけることができない

4 絵を、ようやく見つけた

(解答は②の欄)

(イ) まさなかりなむ

1 つまらないでしょう

2 ふさわしいでしょう

3 読みたいでしょう

4 見たことがないでしょう

(解答は③の欄)

問二 傍線部②「あはれがり、めづらしがりて」を現代仮名遣いに直したものととして適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は②の欄)

1 あわれがり、めづらしがりて

2 あわれがり、めづらしがりて

3 あわれがって、めづらしがりて

4 あきれがり、めづらしがりて

問三 傍線部①「心のうちに祈る」とありますが、どんなことを祈ったのですか。適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は③の欄)

1 源氏物語の若紫の巻だけを全部見せてくださいということ。

2 源氏物語を一の巻から全部見せてくださいということ。

3 源氏物語の作者に一目だけでも会わせてくださいということ。

4 源氏物語を一の巻から順に誰かに読んでほしいということ。

問四 傍線部②「いと口惜しく思ひ嘆かるるに」とありますが、このときの筆者の心情として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑪の欄)

- 1 仏に祈ったのに期待がはずれて、ひどく残念で嘆かわしく思っている。
- 2 仏に祈ったことが仏に通じて、望みのものを手に入れられそうだと喜んでる。
- 3 仏に祈っても願いはかなえられないので、自力で願いをかなえようと決心している。
- 4 祈りが通じなかったのは、仏への自分の祈り方がよくなかったからだと反省している。

問五 傍線部③「のぼりたる」の主語を次から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑫の欄)

- 1 をばなる人
- 2 筆者
- 3 筆者の母
- 4 紫のゆかり

問六 傍線部④「ゆかしくしたまふなるものを奉らむ」とありますが、筆者のおばが言ったこととして適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑬の欄)

- 1 筆者に、幼かった頃に約束していたものをさし上げましょうと言った。
- 2 筆者に、実用的で生活の役に立つものをいただきたいと言った。
- 3 筆者に、実用的で役に立つものをさし上げましょうと言った。
- 4 筆者に、筆者が欲しがっているものをさし上げましょうと言った。

問七 傍線部⑤「得て帰るここのうれしさぞいみじきや」とありますが、このときの筆者の心情を言葉に表したものととして適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

(解答は⑭の欄)

- 1 遠くの親類より近くの他人
- 2 好きこそものの上手なれ
- 3 天にも昇る心地
- 4 えびでたいを釣る



令和4年度

氏名

受験番号

東北高等学校 国語一般A 解答シート

一

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.

二

⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.

三

㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞
.	.	.	.	.	.	.	.

令和4年度

氏名

受験番号

東北高等学校 国語一般A 解答シート

一

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
4	1	2	4	2	1	4	3	1	2	1	4	2

二

⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖
5	1	5	2	1	5	1	5	5	1	2	5	3

三

㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞
3	1	1	2	1	1	4	3